

「破られた兄の日記」

※作品、キャラクターに関するネタバレが多分に含まれています。本編視聴後＋おまけSS「兄の日記」読了後の閲覧を推奨します。

【十月X日】

俺が悪かったんだろうか。

俺が何かしてしまったんだろうか。

こんなことになってしまいう前に、俺にできることはなかったんだろうか。

急に自分に弟ができると聞いた時は確かに驚きはしたものの、嫌だとか面倒だとかマイナスの気持ちは一切抱かなかった。

母が不妊治療をしていたことは自分もよく知っていたし、家系が…ということもあって一人息子だけでは不安なものも十分理解していた。もし自分にとって花鶏が邪魔な存在で、母への理解も無かったら、花鶏のことを悪く思う可能性は否定できない。

だが現実はどうじゃやない。

花鶏がどうしてあんなことをするのか、動機が分からない。

：どうせ日記だ、自分以外に読まれるわけが無いのだから気が済むまで気持ちをつく。

うちはそこそこの名の知れた名家で一般家庭と比べればまあまあ裕福なはずだ。

それこそ花鶏がねだれば親は何でも買い与えていたし（とはいえねだったことなんて数える程度しかないが）、今まで花鶏がいた施設と違って身の回りの物は新品で全て揃えられているし、生活面での不自由はなかったはずだ。

両親は両親で、まあ子供の扱いに長けているかと言われたら微妙なんだが、愛を持って接していたのは自分でも分かる。

石流家に引き取られてから自分で自分を傷つける理由ができたなんて到底思えない。

花鶏が施設にいた時点であんなことをしていたとしたら、恐らく両親から俺に直接伝えられていたと思うし…。

だからこそ、花鶏に何かあったのだとしたら、それは「今」じゃないはずなのだ。そう思いたい。

幼少期心に負った傷は大人になっても治癒が難しいと聞く。

花鶏の過去に何があったのか、何を考えているのか俺には知ることさえできない。

もどかしい。

どうすればいいのかわからない。

後で父に相談する。

きつと今回の件は父の耳にも入っているだろうが、このことを父はどう思っているんだろうか…。

【十月X日】

父に相談した。

「お前にできることは、花鶏の側にいて見守ってあげて、何があっても決して見捨てないことだ」

まず、そう言われた。

「ただ、それが一番難しい」のだとも言われた。

クラスの悪い子にでも何か唆されたんじゃないか、と父に伝えてみたが。

「だとしても、だ」

「そこでこちらが問い詰めて、説教をして一体何になる。余計に花鶏は追い詰められるだけだ」

その言葉に胸が締め付けられた。

あの時、咄嗟に花鶏を叱り付けたが……それは逆効果だったのだろうか。

「遊びでも、ストレス解消でも、……考えたくはないがあれがいじめの一環だったとしても、花鶏は私達に見えないように自分の中だけにおさめて隠していたんだ。それが何故かお前には分かるか？」

「私も母さんもお前も、花鶏はうちの家族の一員だと思っているだろうが、だからといって花鶏自身がうちの家族の一員だとはまだ思っていないだろう」

「花鶏はまだ一人なんだ」

「信頼関係をまだきちんと築けていない以上、むやみやたらと花鶏の心に土足で踏み込んで余計泥沼化するだけだ」

父は最後に、こちらはこちらで何とかしようと思っっているからお前が頭を悩ませなくてもいい。最初に言ったことを守ってくれさえすれば、私はそれで充分だと思っっている。そう告げられて話は終了した。

俺にできることは見守ること、決して見捨てないこと。